美術学校時代前後 —— *L'époque de l'Ecole des beaux-arts*

児島虎次郎は１８８１年（明治１４年）、岡山県成羽町に生まれた。

１９０２年（明治３５年）に東京美術学校西洋画科選科へ入学し、黒田清輝、藤島武二に学ぶ。倉敷の大原家の奨学生となり、後に倉敷紡績の第二代社長となる大原孫三郎と親交を結ぶのもこの年である。

美術学校での虎次郎の成績は優秀で、通常４年かかるところを２年で卒業。同校の研究科に進んだ。

勧業博覧会に出品した二作品のうち、石井十次が経営する岡山孤児院に泊まり込み制作した《なさけの庭》は、一等賞を受賞、皇后陛下が感動され、宮内省買上げとなる。それを評価した大原孫三郎は、虎次郎に渡欧の機会を与えた。

作品名	制作年	制作年齢	素材・材質	寸法(縦×横cm)	所属先
井上こう肖像(模写)	１８９７年(明治３０年)	１６歳	ペンキ・木綿	33.0× 26.0	成羽町美術館
風景	美術学校入学前	———	油彩・カンヴァス	32.5× 40.5	(財)大原美術館
裸婦と椿	１９０３年(明治３６年)	２２歳	油彩・カンヴァス	60.0× 81.7	成羽町美術館
習作 一 男	美術学校在学中	21－23歳	油彩・カンヴァス	61.0× 45.5	(財)大原美術館
習作 一 女	美術学校在学中	21－23歳	油彩・カンヴァス	61.0× 45.5	(財)大原美術館
宵の灯	１９０７年(明治４０年)	２６歳	油彩・カンヴァス	53.0× 41.0	倉敷市立美術館
農婦一「里の水車」のための習作	美術学校在学中	21－23歳	木炭・紙	63.0× 48.0	(財)大原美術館
農婦一「里の水車」のための習作	美術学校在学中	21－23歳	木炭・紙	58.0× 38.5	(財)大原美術館
里の水車	１９０６年(明治３９年)	２５歳	油彩・カンヴァス	87.0×141.0	(財)大原美術館
水車小屋	美術学校在学中	21－23歳	水彩・紙	30.0× 44.0	(財)大原美術館
大原孫三郎像	美術学校在学中	21－23歳	木炭・紙	55.0× 40.0	社会福祉法人 石井記念友愛社
登校	１９０６年(明治３９年)	２５歳	油彩・カンヴァス	133.0×111.5	成羽町美術館

留学時代 —— *Le premier séjour en Europe*

１９０８年（明治４１年）、虎次郎はフランスに渡る。黒田清輝の紹介によりパリでラファエル・コランの教えを受けるが、黒田ら日本人画家が好んだ郊外のグレ村に滞在、制作に傾倒した。

１９０９年（明治４２年）、ベルギーで勉強していた友人、太田喜二郎との再会がきっかけで、児島はゲントに移る。そこの美術アカデミーに入学し、ジャン・デルヴァンらの教えを受ける。

虎次郎は、点描技法に開眼し、従来のスタイルを大きく変える。点描技法は以後の虎次郎の制作の中で様々に変容しながらも重要な柱となっていく。

１９１１年（明治４４年）、パリのサロン・ド・ラ・ソシエテ・ナショナル・デ・ボザール（国民美術協会展覧会）に入選する。翌年春、美術アカデミーを主席で卒業、秋には帰国の途につく。

作品名	制作年	制作年齢	素材・材質	寸法(縦×横cm)	所属先
グレの風景	１９０８年(明治４１年)	２７歳	油彩・カンヴァス	46.0× 61.0	個人
人物	1909－12年頃(明治42－45年頃)	28－31歳頃	油彩・カンヴァス	78.0× 59.0	個人
室内風景	１９０８年(明治４１年)	２７歳	油彩・カンヴァス	111.0× 88.0	宮崎大学
化粧	１９０８年(明治４１年)	２７歳	油彩・カンヴァス	80.5× 65.0	(財)大原美術館
ベゴニアの鉢	１９１０年(明治４３年)	２９歳	油彩・カンヴァス	91.0×118.0	(財)大原美術館
和服を着たベルギーの少女	１９１１年(明治４４年)	３０歳	油彩・カンヴァス	116.0× 89.0	(財)大原美術館
睡れる幼きモデル	１９１２年(明治４５年)	３１歳	油彩・カンヴァス	114.5× 88.0	(財)大原美術館
姉妹	１９１１年(明治４４年)	３０歳	油彩・カンヴァス	162.0×114.0	(財)大原美術館
凝視	１９０９年(明治４２年)	２８歳	油彩・カンヴァス	116.0× 89.0	(財)大原美術館
市場	1910－12年(明治43－45年)	29－31歳	油彩・板	22.7× 32.0	(財)大原美術館
婦人像	1910－12年(明治43－45年)	29－31歳	油彩・ボード	22.7× 32.0	(財)大原美術館
船員	１９１２年(明治４５年)	３１歳	油彩・板	31.0× 21.5	(財)大原美術館
旗	1910－12年(明治43－45年)	29－31歳	油彩・ボード	22.5× 32.0	(財)大原美術館

帰国後 —— *Après le retour au Japon*

１９１２年（大正元年）１１月、虎次郎は帰国。翌年、大原孫三郎夫妻の媒酌により、高鍋町出身で社会福祉事業の先駆者・石井十次の長女、友（とも）と結婚。倉敷の北西、酒津にある大原家の別荘内に新居を構え、制作に励む。

留学、結婚と順調な人生に見えたが、虎次郎の絵画制作は壁にぶつかる。帰国してからの数年間は、スランプとの戦いの時期だったといえる。ほとんどの油絵画家が帰国してぶつかる壁でもあった。

１９１８年（大正７年）、虎次郎は中国、朝鮮半島を旅行する。ヨーロッパ、日本とも異なった「風土」から多くのものを得たようである。この前後から、作風に少しずつ変化が生じている。その変化とともに、画家に新たな自信が生まれつつあるのが感じられる。屏風絵をはじめとする日本画を精力的に描きだすのもこの頃である。

作　品　名	制　作　年	制作年齢	素材・材質	寸法(縦×横cm)	所　属　先
親牛仔牛	１９１６年(大正５年)	３５歳	油彩・カンヴァス	111.0× 91.5	成羽町美術館
酒津の書斎	1913－17年頃(大正2－6年頃)	32－36歳頃	油彩・カンヴァス	60.0× 50.0	三乗工業株式会社
酒津の農夫	１９１４年(大正３年)	３３歳	油彩・カンヴァス	162.0×114.5	成羽町美術館
琵琶を持つ女	１９１５年(大正４年)	３４歳	油彩・カンヴァス	79.0× 65.0	倉敷市立倉敷西小学校
朝　顔	1916－18年(大正5－7年)	35－37歳	油彩・カンヴァス	196.5×135.0	(財)大原美術館
垂乳根の桜	制作年不詳	———	油彩・カンヴァス	52.8× 56.5	オーストリア サンクトペルテン市
杭　州	１９１８年頃（大正７年頃）	３７歳頃	油彩・カンヴァス	51.0× 63.5	個　　人

第２・第３渡欧期 —— *Le deuxième et le troisième séjour en Europe*

１９１９年（大正８年）、大原孫三郎のすすめもあり、虎次郎は２度目のヨーロッパ旅行へ出発した。その際、虎次郎は大原孫三郎に美術品の蒐集を進言する。本格的な蒐集活動の始まりであった。

パリについた虎次郎は、その年の末から翌１９２０年（大正９年）初めにかけてスペインへ旅行している。その独自の文化に触れながら熱心に制作する。パリに戻った虎次郎は、大原孫三郎から美術品蒐集の承諾を受け、モネの《睡蓮》など２０数点を入手し、翌年帰国。帰国後、倉敷で蒐集作品による展覧会を開催し大好評を博している。

１９２２年（大正１１年）、さらに力をいれた蒐集を目指し再び渡欧。エル・グレコの《受胎告知》など５０数点を入手。虎次郎は２度の渡欧の合間には２度目の中国旅行もし、また最後の蒐集旅行の往復路にはエジプトに立ち寄っている。

美術品蒐集に奔走したこのような時期が、芸術上の円熟期と重なっていることから、虎次郎にとって蒐集もまた創造活動の一部であったといえるであろう。

作　品　名	制　作　年	制作年齢	素材・材質	寸法(縦×横cm)	所　属　先
秋	１９２０年(大正９年)	３９歳	油彩・カンヴァス	200.0×136.0	ポンピドゥーセンター、パリ国立近代美術館
アルハンブラ宮殿	１９２０年(大正９年)	３９歳	油彩・カンヴァス	68.5× 56.5	(財)大原美術館
ジプシー地下寺院	１９２０年(大正９年)	３９歳	油彩・カンヴァス	58.0× 67.0	(財)大原美術館
デッキパッセンジャー習作	１９２１年(大正１０年)	４０歳	油彩・カンヴァス	69.5× 57.5	(財)大原美術館
少女の像	１９２０年(大正９年)	３９歳	油彩・ボード	27.0× 22.0	(財)大原美術館
パンテオン	1919－23年(大正8－12年)	38－42歳	油彩・ボード	41.0× 32.8	(財)河村美術館
紺衣の女	１９２３年(大正１２年)	４２歳	油彩・カンヴァス	115.0× 88.0	(財)大原美術館

晩　年 —— *Les dernières années*

帰国した翌年の１９２４年（大正１３年）、虎次郎に、明治神宮奉賛会の絵画館へ納めるための壁画を制作してほしいとの依頼がきた。明治天皇の一生を描きつづる壁画の一点で、テーマは「対露宣戦布告御前会議」。以後、この大作のために大変な熱意を投入することとなる。

その間、虎次郎の中国への憧憬は大きく、１９２４年（大正１３年）と１９２６年（大正１５年）に中国へ旅行し、その風物をかなり集中して描いている。

１９２８年（昭和３年）９月、「対露宣戦布告御前会議」制作に全力を傾けたことから、労苦が重なり倒れ、翌年３月８日に急逝。蒐集した近代ヨーロッパ美術の作品群など、虎次郎の偉業をたたえ、大原孫三郎の尽力により、没年の翌年、倉敷に「大原美術館」が完成した。

作　品　名	制　作　年	制作年齢	素材・材質	寸法(縦×横cm)	所　属　先
中国の少女	１９２０年代	―――	油彩・カンヴァス	85.0× 62.0	社会福祉法人 石井記念友愛社
蘇州の廟	１９２４年(大正１３年)	４３歳	油彩・カンヴァス	63.5× 50.5	(財)大原美術館
早　春	１９２６年(大正１５年)	４５歳	油彩・カンヴァス	86.5×122.0	(財)大原美術館
酒津の庭（水蓮）	1924－28年頃(大正13-昭和3年頃)	43－47歳頃	油彩・カンヴァス	81.0× 65.0	静岡県立美術館
宮中御座所－千鳥の間図	１９２７年頃（昭和２年頃）	４６歳頃	油彩・カンヴァス	120.0×135.0	個　　人
対露宣戦布告御前会議習作（１）	１９２７年頃（昭和２年頃）	４６歳頃	油彩・ボード	95.0× 79.0	成羽町美術館
対露宣戦布告御前会議習作（２）	１９２７年頃（昭和２年頃）	４６歳頃	油彩・ボード	95.0× 79.0	成羽町美術館

虎次郎をとりまく人々 ―― *Les gens qui entourent Torajirô*

虎次郎と大原孫三郎の出会いは、虎次郎が美術学校に入学し、大原奨学生となるための面接を受けた時である。この二人の青年は、初対面の時からお互いの人格にひかれ、それが終生変わらぬ友情として芽生えていく何かを感じあったと思われる。この日以来、二人の間には、信頼と尊敬の心の交流が続いた。

虎次郎の出世作《なさけの庭》は、石井十次が経営する岡山孤児院を画題に、泊まり込み制作したものである。虎次郎の誠実な人柄に十次は「絵描きにするには惜しい」と感心。虎次郎は「惜しまれるような絵描きにはならん」と反発したという。このころ虎次郎は、孤児院の食堂でよく少女を見かけた。彼女は無邪気で明るいが、虎次郎に会うと目礼するだけで足早に去っていく。山陽高女に通う十次の長女、友（とも）であった。孫三郎の支援による５年間の欧州留学から帰国、孫三郎夫妻の媒酌により、その年日本女子大を卒業した友（とも）と結婚する。

１９１４年（大正３年）１月、友は長男、虓一郎を出産。同日、茶臼原で療養中の十次は、危篤状態に陥り、初孫の男子安産を聞き、かすかにうなづいて、息をひきとったという。

作　品　名	制　作　年	制作年齢	素材・材質	寸法(縦×横cm)	所　属　先
自画像	１９１７年頃（大正６年頃）	３６歳頃	油彩・カンヴァス	56.5× 44.5	(財)大原美術館
石井十次の肖像	１９１３年(大正２年)	３２歳	油彩・カンヴァス	60.0× 49.0	社会福祉法人 石井記念友愛社
大原孫三郎の肖像	１９１５年(大正４年)	３４歳	油彩・カンヴァス	81.5× 65.5	個　　人
友夫人の像	１９１３年(大正２年)	３２歳	油彩・カンヴァス	115.0× 89.0	社会福祉法人 石井記念友愛社
子供の昼寝	１９１４年頃（大正３年頃）	３３歳頃	油彩・カンヴァス	81.0× 64.5	(財)若竹の園
朝顔と子供	１９１５年(大正４年)	３４歳	油彩・カンヴァス	81.0× 64.5	(財)大原美術館
雁来紅と子供	１９１７年(大正６年)	３６歳	油彩・カンヴァス	116.0× 90.0	成羽町美術館
自画像	1909－12年頃(明治42－45年頃)	28－31歳頃	油彩・カンヴァス	115.0× 89.0	社会福祉法人 石井記念友愛社

日本画 ―― *Les peintures dans le style traditionnel japonais*

日本の油絵画家が趣味で日本画を描く例は珍しくない。虎次郎も早い時期から日本画を描いている。彼の場合も、座興を初めとする余技のようなものであったが、余技に忙殺されることを避けてか、１９１７年（大正６年）、友人宛てに『日本画を廃業する』と手紙を書いている。ところがこの年を機に、虎次郎の日本画制作は圧倒的に増えていき、質、量ともに向上していくのである。それは虎次郎の油絵が円熟してくる時期と一致しており、制作への自信がそのレパートリーを自然に広げていったとも考えられる。日本画制作は、もはや虎次郎にとって余技ではなく、自らの制作意欲を開放させる方法となったといえよう。

日本画の制作は、本業の油絵と異なり、肩の力が抜け、自由に描かれている。晩年には、意識して日本的、東洋的なスタイルを取り入れようとする傾向がある。そこには自らの制作上のよりどころを求める彼の苦悩が反映しているが、一方では、そうした苦悩を突き抜けた可能性も見受けられる。

作　品　名	制　作　年	制作年齢	素材・材質	寸法(縦×横cm)	所　属　先
春－垂乳根の桜	１９１９年頃（大正８年頃）	３８歳頃	紙本著色	173.0×378.0	個　　人
秋－芳井天神の楓	１９１９年頃（大正８年頃）	３８歳頃	紙本著色	173.0×378.0	個　　人
柿	１９１７年(大正６年)	３６歳	絹本著色	126.0× 33.5	個　　人
雁来紅図	制作年不詳	―――	紙本著色	136.5× 33.8	個　　人
洞庭湖	１９１８年(大正７年)	３７歳	紙本著色	170.0×370.0	個　　人

作　品　名	制　作　年	制作年齢	素材・材質	寸法(縦×横cm)	所　属　先
姫路城	１９１７年(大正６年)	３６歳	絹本著色	122.0× 42.5	個　人
菜果図	１９２２年(大正１１年)	４１歳	絹本著色	174.5× 94.0	個　人
ゲント市内	１９２０年頃(大正９年頃)	３９歳頃	絹本著色	114.0× 33.5	個　人
寶来山水	１９２２年(大正１１年)	４１歳	紙本著色	150.0× 45.0	個　人
滝	１９２１年(大正１０年)	４０歳	絹本墨画	134.0× 36.5	個　人
山　水	制作年不詳	――	絹本著色	108.0× 35.5	個　人
金字塔　埃及王朝五千年之遺跡	１９２６年(大正１５年)	４５歳	紙本著色	149.0× 71.0	個　人
埃及帝武王朝三千年之遺跡	１９２６年(大正１５年)	４５歳	紙本著色	152.0× 81.0	個　人
寶来山	１９２８年(昭和３年)	４７歳	紙本著色	145.0× 47.0	個　人

陶　器　―― *Les céramiques*

虎次郎は画家としてだけでなく、デザイナー、設計者としても優れた手腕を発揮している。１９２６年（大正１５年）に酒津の邸内に住居兼アトリエとして建築した「無為堂」には、エジプトや中国の影響のもとに様々な意匠を凝らし、同年、倉敷川に完成させた「今橋」では、厳重な基礎に立つアーチ式橋の欄干に中国式の竜のデザインを施している。

陶芸も、余技として早くから行われていたようである。自宅のあった酒津は、古くから陶芸が盛んで、彼の陶芸作品は、この酒津か、あるいは大原孫三郎の屋敷のあった京都の楽焼の窯で制作されたものとみられる。器は専門の陶工の手によるものだろうが、その独特の形には虎次郎の注文が反映しているようである。絵付けは、のびのびと、器の性格に合わせ、平面的、装飾的、また、抽象的、あるいは写実的に描かれ、題材も自然の草木から中国、エジプトの模倣など多岐にわたっている。絵画とは別の次元で虎次郎の感情のひらめきを感じさせている。

作　品　名	制　作　年	制作年齢	素材・材質	寸法(縦×横cm)	所　属　先
かきつばた図水指	制作年不詳	――	――	17.0× 15.2	(財)大原美術館
彩文の壷	制作年不詳	――	――	19.0× 21.5	(財)大原美術館
寄せ描きの鉢	１９１５年(大正４年)	３４歳	――	7.6× 16.6	(財)大原美術館
人物文の皿	制作年不詳	――	――	3.7× 13.5	(財)大原美術館
花文の鉢	制作年不詳	――	――	14.5× 20.0	(財)大原美術館
花文の鉢	制作年不詳	――	――	11.0× 19.5	(財)大原美術館
草花文の角皿	制作年不詳	――	――	3.0× 22.0	(財)大原美術館
葡萄文の皿	制作年不詳	――	――	4.0× 22.3	(財)大原美術館

デッサン・水彩画　―― *Les dessins et les peintures à l'eau*

ゲント美術学校での虎次郎は、午前中は油彩のクラスに出席、午後は制作、夜もデッサンのクラスに出席していた。これら《裸体の習作》（デッサン）は、その教室で制作されたものであろう。

輪郭線をほとんど用いず、斜めのハッチング（線影）だけで描かれ、人体というヴォリュームを光と影の相の中にとらえようとする努力がみてとれる。

作　品　名	制　作　年	制作年齢	素材・材質	寸法(縦×横cm)	所　属　先
裸　婦	美術学校在学中	21－23歳	木炭・紙	64.0× 48.5	(財)大原美術館
裸婦座像	美術学校在学中	21－23歳	木炭・紙	61.5× 48.0	(財)大原美術館
裸体の習作	ゲント美術アカデミー時代	28－31歳	木炭・紙	101.0× 65.2	成羽町美術館
裸体の習作	ゲント美術アカデミー時代	28－31歳	木炭・紙	101.0× 65.2	成羽町美術館
裸体の習作	ゲント美術アカデミー時代	28－31歳	木炭・紙	102.0× 70.0	成羽町美術館
西湖畔	１９１８年(大正７年)	３７歳	水彩・紙	30.5× 39.5	成羽町美術館
スケッチ帳(７点)	1918－23年頃(大正7-12年頃)	37－42歳頃	鉛筆・水彩・紙	29.0× 37.0	個　人

※展示の都合により、出品作品を変更することがあります。